

言葉への信頼

現在は SNS が主要なコミュニケーションツールになることで、大人も子どもも常に感覚的で短い言葉が飛び交い、このことで人とつながっている感覚を確かめようとしています。

しかし「言葉は通じ過ぎると、衰微する」と言った人がいます。これからの社会では、言葉を生み出し豊かにしていく機会が喪失されていくことを強く危惧しています。

以前行われた OECD-PISA 調査によると、「日本の子どもは外国の国々と比較して、学校に行き授業にはよく参加しているが、教室の中で居場所感がなく孤独を感じている子どもが多い」傾向が強くなっています。教室に居て実際に友達と言葉を交わしていても、そこに人と人が交わることで生まれる連帯感が脆弱になっていることを示唆しています。

文化庁の答申(2004年)には、こんなことが書かれています。

『言葉によって物事が変わり、また変えていくことができるという言葉への信頼を、学校教育の中だけではなく、社会全体で(子どもたちに)教えていくことが大切である…』かなり前の答申でありながら、現代社会への警告として今でも通用すると思っています。

一方、東京大学名誉教授の秋田喜代美氏は、『言葉では変えられないものも数多くある。言葉は万能ではないことによる言葉の非力さ、脆弱さを認識する中でこそ、言葉への信頼は得られるだろう』と逆説的に語っています。

学校や教室の中の言葉は、ともすると「正義の力」や「人の言葉を平準化する力」をもちやすいと思っています。そしてそれは、無意識のうちに一部の子どもを排除し統制する方向に向かうことが危惧されます。教師がそのことを感知する繊細な感性や、子ども一人一人が紡ぎ出した言葉の重みを受け止める気持ちを失ってはなりません。

前述の秋田氏は、『言葉への信頼は、言葉で周囲を変えていくことができるという主体性や能動性の認識ではなく、言葉によって自らが変わっていく応答性や受容性から始まる…』とも言っています。とても共感できる言葉です。言葉は他者に向かって自分を開いていこうとする営みから生まれるのです。一方的に他者を変えるための手段としての言葉ではなく、子どもと教師、子ども同士の応答性や受動性の中に生まれるものであり、聴き手が心を開いて相手の言葉を聴き語りかけるといった関係性を大切にしていきたいと思います。